

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：創造の王国展

事業者名：辰野美術館

住所：長野県上伊那郡辰野町樋口 荒神山公園内

TEL：0266-43-0753

FAX：0266-41-4572

HPアドレス：www.town.tatsuno.nagano.jp/sc/artm/



連携事業者名：信州豊南短期大学 日本福祉大学

会場：辰野美術館

事業期間：平成22年6月1日～平成23年3月15日

1. 館の使命と本事業の関係

- ・当地域の小中学生作品展を毎年開催し、子どもの造形表現をめぐって、地元短大等と博学連携して審査や共同研究を行なっている。
- ・地域の素材や文化資源の再発見につながるワークショップや小中学校への出前授業を実施し、博学連携事業では短大生に社会人をまじえた公開講座を開講し、進めている。
- ・地元住民有志団体や商工会、商店街と連携・協働し、美術を介在させた手法をまちづくりに生かす足がかりを探ってきた。

2. 企画内容

①事業目的

- ・五十数年前に当町を放浪し、1ヶ月滞留した画家・山下清の作品2点を所蔵する当館の意義を深め、地域の親しみやすい美術館をめざし、曲解されがちな山下の特質を再考するとともに、知的障害者の表現活動や制作を再評価する展覧会を開催し、地域の人々が美術や表現活動に境界意識を持たず、身近に親しんでいく契機とした。
- ・山下清に関するこの地の当時の記憶を掘り起こしながら継続的に展覧会を開催し、障害者の表現を尊重する地域づくりにつなげ、福祉や地域社会に美術を介在させたまちづくりの手がかりを得ることを目指した。

②事業概要

- ・長野県内の特別支援学校や支援学級の児童生徒の作品、知的障害者施設入所者の作品を紹介する展覧会を開催した。
- ・当町と提携関係にある信州豊南短期大学や日本福祉大学の参画を得て、協力委員会を結成し、施設訪問や作品調査を行なった。
- ・当地を訪れた山下清を1ヶ月にわたって取材した元記者や、障害者施設での制作指導の経験がある作家によるギャラリートークを開催した。
- ・当館が所蔵する山下清の貼り絵《あおい》は退色が著しく、制作当時の色彩を自由に想像し、花や昆虫をモチーフにした貼り絵の制作ワークショップを実施した。
- ・知的障害者等の表現活動への理解を広めるため、報告書を作成し、県内を中心に配布した。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

6月 協力委員委嘱

博学連携事業を進めている地元の信州豊南短大及び当町と連携関係にある日本福祉大学の教職員、県内養護学校校長、地元の造形作家らにより構成。

7月 協力委員会開催

展覧会の趣旨、構成、作品調査、集荷等について協議。

8月～9月 作品調査、選定、展示

県内養護学校、特別支援学級、知的障害者施設等に出品依頼し、展示・公開。

8月 貼り絵ワークショップ開催

貼り絵で知られる山下清の作品（当館所蔵）に因み、小中学生を対象に八幡学園講師の松田拓実氏の指導により開催。

9月18日～10月17日 創造の王国―解き放たれた表現展開催

10月15日ギャラリートーク開催

知的障害者施設等での指導経験を持つ地元の造形作家・天野惣平氏に依頼し、開催。

10月～3月実施報告書作成、配布

出品作品を中心に、展覧会開催経過などを盛り込んだ実施報告書を作成し、県内各学校や施設に配布。

3月 協力委員会開催

事業の総括と23年度もの継続実施を協議。



赤羽美加恵《ローズタワー》陶



貼り絵ワークショップ



ギャラリートーク

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 2,594 人

内 訳：展覧会入場者 2,542 人

ワークショップ参加者 22 人

ギャラリートーク参加者 30 人

(3) 事業により作成した印刷物等

ポスター、チラシ、実施報告書

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

なし

○テレビ、関連誌等

なし

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

- ・特別支援学校、支援学級の児童・生徒をはじめ、知的障害者の無垢な表現活動を正に評価し、多様な表現を尊重する契機となった。
- ・親しみやすい人柄として知られている山下清に関するこの地の当時の記憶を掘り起こしながら、福祉や地域社会に美術を介在させたまちづくりの手がかりを得た。
- ・報告書の配布によって、以降学校教育現場等での活用が見込まれる。（通常の授業のほか、博学連携による出前授業や、大学の福祉関連学科や幼児教育学科における使用など）
- ・来場者のうち、10%にあたる約250人が障害者とその介助者で、当館に対する新たな評価につながった。平成23年度も継続して展覧会を開催する予定で、障害者の表現を尊重する教育や地域づくりにつなげていきたい。